新潟県の農業と小学校の教科書

はじめに

現在、我が国の食卓に並べられている食糧は、カロリー計算で約四〇％が外国からの輸入品でまかなわれています。二十一世紀には人口増加と食糧生産とのバランスから見て、地球的規模での食糧不足になるおそれがあるというので、世界中の多くの国や地域が食糧の自給率を高める努力をしています。今から十六年前、我が国の自給率（カロリー）が約五七％だった時でさえ、国連加盟国一六三のうち一四一番目でしたから、現在は一五五番目あたりでしょうか。それなのに、我が国は果樹を切り倒したり、家畜を減らしたり、水田を減反したりしてまで、外国からの農産物輸入を増やしているのです。

本稿では、将来をになう子どもたちに、我が国の農業がいかに私たちの暮らしや環境や文化にとって大切な役割を果たしているか、しっかり知ってほしいにもかかわらず、子どもたちが現に習っている教科書で、農業がどんなふうに扱われているのかを、検証してみようと思います。

現在、本県魚沼地方で使用されている小学校五年社会科の教科書（学校図書）は、新津市のある大規模農家をとりあげていますが、あまりにも問題点が多いというので、九二年四月から六月にかけて、「にいがた食と農と健康、教育のネットワーク」という市民団体

や新潟県農協中央会が、こぞって抗議行動を起こしました。いうまでもなく、この教科書も文部省検定済みですが、どこに問題があるのか、われわれの立場で、いわば逆検定してみましょう。

以下、教科書の順序にしたがって述べます。

越後平野の農業

教科書は、先生が見せた一枚の写真をめぐって、子どもたちが交わす会話から始まります。

「ずいぶん広い水田ね」

「水田が、きちんと長方形に区切られているよ」

「道路は、たて・横にのびているわ」

「あれ、水田の中に畑のようなものもみえるよ」

と、たいへん重要なことに子どもたちが気づいています。見つけた子どもたちの観察眼の鋭さに驚きます。これは、強制減反のために畑作への転換を余儀なくされている水田なのです。こういう水田は稲作地帯といわれる本県でも約三〇％に達していました。全国では約九〇万ヘクタールにもなりました。この教科書を書いた先生は、このことに触れるつもりで、この会話を入れたのかもしれません。ところが教科書では「この水田は、どこまで広がっているのかな」と、せっかくの子どもの目をそらさせています。

国による農業生産の調整は一九七〇年から始まりました。七三年の検定済教科書では、「この生産調整で農家の人々が増産のめあてを失い、不安定な作物の値段や、安い輸入農産物にどうしたらよいか迷ったり、出稼ぎなどにでる農家が増える」などの状況が述べられ、「農家の人々の不安な状態をたてなおすことに力をいれていく必要がある」と結んでいました。そのときから二十年も経たないのに、文部省検定済の教科書が、農政の大転換に歩調を合わせるかのように、変わってしまったのは驚くべきことです。

次に教科書では、先生が、新潟県の地形と土地利用のようすを示した図を子どもたちに見せ、越後平野のほとんどが田として利用されており、新潟県の米の大部分を生産している、と述べています。実態はどうでしょうか。

新潟県がまとめた「新潟県農業の動き（九三年版）」によると、全県に対する中山間地（山場）のウエイトは総面積七三％、総人口二七％、農家戸数四九％、農家人口四五％、農業就業人口四三％、農業粗生産額三四％、米粗生産額三三％と、平野部にくらべてそんなに低くはないのです。山場でも水さえあれば田を開き米を作るのは、豪雪の下で地力を保全し、雪解け水を

田面にたくわえ、大切な用水とするばかりでなく、山くずれ、地すべり、洪水を防いでいるのです。このように重要な山場の水田の存在を、子どもたちの目からそらさせているのは、意図的とさえ思われます。

というのは、その後の農政の考え方が、自由競争のもとでの経済第一主義にかたより、生産性が高くコストも安く見える平場の大規模水田経営に、施策の中心をおくようになってきたからです。教科書の方がそのつゆはらいをやったかのようです。

稲作農家をたずねて

教科書では、子どもたちが越後平野の稲作を調べるために、新津市で二二ヘクタールもの水田をたがやしている大規模農家をたずねます。新潟県の農家一戸あたりの経営面積は、田一・一五ヘクタール、畑〇・〇七ヘクタール、計一・二二ヘクタールにすぎないのです。子どもたちに調べさせるモデルは、皆が努力すれば到達できるていどでなければ、大部分の農家にとっては夢に過ぎなくなります。「大部分の農家をあきらめさせて、ふるいおとしてしまえ」という政治的手練手管としてさえ許しがたいのに、まして、子どもたちが学習する教科書で、こんな手段をろうするのは、まさに罪悪といっても良いのではないでしょうか。

モデルとしては、一戸平均の約二十倍もある農家でなく、いくらか大きめにとっても、四ないし五ヘクタールの農家の方が実態に見合っているのではないでしょうか。実は、農水省が発表した新農政プランでは、一五ないし二〇ヘクタールを将来の目標としています。ここでも文部省の教科書が農水省のお先棒をかついでいます。

農作業の機械化をはかる

では、大規模農家は農業生産のコストを下げ、輸入農産物とたちうちできるでしょうか。子どもたちがたずねた農家は四十年かかって水田を一・九ヘクタールから一七ヘクタールに増やし、そのほかに五ヘクタールの畑を経営するようになったのですが、それを可能にしたのは土地改良と農作業の機械化だと述べています。たしかに、土地を整備したので機械が使いやすくなったのに違いないのですが、土地改良費と機械購入費のことは、教科書のどこにも出てきません。子どもたちは、こんな広い水田を家族三人でたがやしていることを知っておどろくのですが、家族労働以外にどれだけの手つだいを雇っているのかも書かれていません。

この農家も五ヘクタールの強制転作を受け入れており、だいず三ヘクタール、大麦一・三ヘクタール、チューリップ〇・七ヘクタールを作っているのですが、その手間や費用のことも書かれていません。コストをさげるのに役立ったのか疑問です。

耕地をふやす

子どもたちは、この農家がどのような考えで耕地を増やしてきたのかをきいてみました。その答えは、

一・九ヘクタールの水田では生活できないので、会社につとめながら農業を続けることも考えましたが、わたしは農業だけでくらしたいという気持ちを強くもっていました。そこで、よその農家から水田を買ったり借りたりして、年々耕地を広げてきたのです。

とのことです。

結局は気持ちの問題ということで、文部省お得意の精神主義・修身的美談に終わってしまいます。国にとっては、まさに優等生の答えです。ここから「兼業農家は、やる気のない怠け者だから切り捨てろ」との政策も出てきます。

でも、新潟県の農家は九〇％近くが兼業農家で、たいせつな食糧生産をしながら、第二次産業、第三次産業にもたずさわっているのです。そのことを子どもたちに、しっかり知ってもらう必要があります。特に中山間地の水田は、先に述べたとおり、山林と同様に、環境保全や治山、治水、利水のうえで大きな公益性をもっており、農家はその役目もになっているのです。外国では、その役目に対して国や地方自治体が補償するところが少なくありません。我が国でもそろそろ、そういう政策が必要になっています。

稲作農家の願い

子どもたちの問いにこたえて、教科書の大規模農家は次のように語ります。

米は日本人の主食で、米づくりはやりがいのある仕事です。米があまるからといって、ほかの作物をつくっているだけでは、問題の解決にはならないと思います。米は、わたしたち稲作農家にとって、いちばん安心してつくることのできる作物なのです。

わたしは、もっと耕地をふやしておいしい米をたくさんつくりたいですね。そうすれば、高い値段で買った農業機械をむだなく使えるし、収入も多くなります。また、外国の米が輸入されても、競争でき

て、四十三団体・六十八個人のよびかけで、「コメと子どもを守る緊急集会」が開かれ、政府に対し強い抗議の姿勢を示しました。

付　記

以上の文章は、これと別の題名で、一九九三年十月新津市文化の会で講演し、さらに、当研究所の機関誌『にいがたの教育情報』三十六号・三十七号（九四年一月・五月）に掲載したものの要約であることをおことわりします。また、その後の新しい資料にもとづく記述も、若干つけくわえました。詳細は、前記の『にいがたの教育情報』をごらんねがいます。

（長崎　明）

セコムが示す教職員の超多忙

次表は、ある中学校（中越地区）のセコムの記録（九六年七月）です。月の全部が超過勤務、そのうち午前零時以降までが一カ月八回。

生徒たちが、事故を起こしたときは徹夜になることもあるでしょうが、回数が多すぎませんか。

A中学校施設警備機器セット開始時刻一覧
（7月分）

セット開始時刻	日数	備　　考
午後5時～午後8時	7	7/6，8，24，26，29，30，31
午後8時～午後10時	7	7/1，10，13，16，19，20，25
午後10時～午前0時	4	7/2，3，12，15
午前0時～	8	7/4，5，9，11，17，18，22，23